

■社会貢献活動

項目	内容
<p>本学電子機械工学科の兼宗研究室の学生が執筆に携わった書籍「まずは、ここからプログラミング事例集 selection」（東京書籍）が出版されました</p>	<p>本書は2020年度から小学校で必修化となったプログラミング教育を踏まえ、高等学校の教員や生徒を対象にした、プログラミング初心者でも分かりやすく学べる事例集です。データサイエンスや人工知能分野で注目されているPythonをはじめ、大学入学共通テストで使われているDNCLやJavaScript、Scratchなどについて、それぞれの言語の紹介や考え、プログラムの組み方などを紹介しており、ページに示されている実際の実行画面を見ながら、事例をもとに学ぶことができます。</p> <p>執筆は、兼宗研究室に所属する本多佑希さんのほか、ICT社会教育センター長代理の兼宗進教授、本学メディアコミュニケーションセンターの長瀬寛之特任准教授が、東京農工大と明星大とともに携わりました。</p> <p>本書が扱うPython、DNCL、JavaScriptのプログラムは、兼宗研究室と東京農工大、明星大学の共同研究の成果であるオンラインプログラミング環境「ビットアロー（Bit Arrow）」を使い、ブラウザ上で学習することができ、無料でPDFが公開されているので、詳しくは下記関連リンクをご参照ください。</p>
<p>令和3年度 中学校技術分野の教科書で兼宗教授が開発したプログラミング言語が紹介されています</p>	<p>工学部電子機械工学科の兼宗進教授が開発したプログラミング言語「ドリトル」が、令和3年度 中学校技術分野の文部科学省検定教科書で紹介されています。教育用プログラミング言語「ドリトル」は、小中学校ならびに高等学校においても幅広く利用されています。</p> <p>兼宗教授は小学校から高等学校までの情報教育を検討する文部科学省中央教育審議会情報ワーキンググループの委員であり、プログラミング教育についての有識者会議でも委員を務めています。</p> <p>▼掲載教科書一覧          「新しい技術・家庭 技術分野 未来を創るTechnology」（東京書籍株式会社/令和3年2月10日発行）          「New技術・家庭 技術分野 明日を創造する」（東京書籍株式会社/令和3年2月5日発行）          「New技術・家庭 技術分野 明日を創造する技術ハンドブック」（教育図書株式会社/令和3年2月5日発行）          「技術・家庭 技術分野 テクノロジーに希望をのせて」（開隆堂出版株式会社/令和3年2月5日発行）</p>
<p>機械工学科の阿南景子教授が日本冷凍空調学会 学術賞を受賞しました</p>	<p>機械工学科 阿南景子教授が、日本冷凍空調学会 学術賞を受賞しました。</p> <p>日本冷凍空調学会賞は「冷凍・空調・ヒートポンプおよび食品冷凍などの科学・技術の向上と普及を奨励し、さらに若い研究者・技術者を育成啓発すること」を目的に設けられ、学術賞は、前年1月1日より12月31日までの1年間に発表された論文のうち、内容が斬新で優秀なものに授与されます。</p> <p>5月27日（木）、阿南教授は大石利光理事長・学長のもとを訪れ、受賞を報告しました。</p> <p>今回受賞した論文は、阿南教授と昨年修了した大学院生（阿南 啓介さん）が合同で取り組んだ内容です。スワップ圧縮機で発生するオールドリングによる振動の発生を抑制し、激しい打撃音を発生したりオールドリング自体が破損する場合があります。この現象を検討、解析し、スラップの動的挙動と発生限界速度を明らかにしました。さらに、簡単なモデル実験を行い、スラップ現象の発生とその動的挙動について定性的な検証を行いました。</p> <p>受賞名：公益社団法人日本冷凍空調学会 日本冷凍空調学会 学術賞          表題：スワップ圧縮機のオールドリングで生じるスラップ現象          日本冷凍空調学会論文集 Vol.37.No.2掲載          受賞者：阿南 景子・阿南 啓介</p>
<p>「超eスポーツ学校」による～無料で学べるeスポーツ講座開催～で本学大学院生の山口勇さんが「起業」回の講師を務めます</p>	<p>eスポーツを通じた教育の機会を提供することを目的に共同で設置したコミュニティ・連絡組織「超eスポーツ学校」にて、eスポーツ講座カリキュラムを実施。講座は全11回構成。最後11回目のテーマ「起業」では、株式会社PACKage代表であり、本学大学院 総合情報学専攻デジタルアート・アニメーション学コースの山口勇さんが講師を務めます。</p> <p>講座はZoomでの動画配信形式となり、参加は無料です。</p>
<p>7月1日から新型コロナウイルスワクチンの職域接種を開始しました</p>	<p>7月1日（木）、職域接種会場の業務にあたる本学教職員や医療福祉工学科の大学院生ら40名に対してワクチンの先行接種を行いました。</p> <p>大阪電気通信大学では、新型コロナウイルスワクチンの職域接種を実施するため、四條観キャンパス10号館内に会場を設け、本学医療健康科学部の医師免許や臨床工学技士の資格を持つ教員、看護資格を持つ職員に加え外部の医療機関の医師・看護師の協力体制を組んでいます。これまでに、上記の教職員と臨床工学技士の資格を持つ医療福祉工学科の大学院生らが事前の打ち合わせやシミュレーションを念頭に、あらゆる場面を想定して準備を進めてきました。</p> <p>これを受けて、7月7日（水）からの本格実施では、臨床実習を行う医療健康科学部の学生や教職員を対象とし、今後ワクチンの納入状況を見ながら接種対象者を拡大していく予定です。</p> <p>本学では、医療従事者の資格をもつ医療健康科学部に所属する教員や事務室職員らを中心としたチームに外部の医師・看護師がワクチン接種の問診・打ち手を担当し、受付・予診票確認・接種補助、接種済証の発行等は本学の教職員、医療福祉工学科の大学院生が行います。</p> <p>はまだ小児科、産生会館や産科病棟をはじめ、多くの階層機関の支援を受けて、安全・安心に接種を実施してまいります。</p> <p>学生のみなさんは、今後のお知らせには十分注意し、MyPortalの情報をよく確認してください。</p> <p>なお、今回の新型コロナウイルスワクチンの接種は強制ではありません。身体的な理由や様々な理由によってワクチンの接種を希望しない人もいます。新型コロナウイルスワクチンの接種の可否判断は、尊重されるべきものであり、差別やいじめなどが起こることのないよう、周囲への配慮をお願いします。</p>
<p>「防災セミナー（天気の読み方と地区防災計画）」で地域連携推進センターの中田亮生センター長が講演を行いました</p>	<p>日本防災士会大阪府支部主催、寝屋川市危機管理課共催の「防災セミナー（天気の読み方と地区防災計画）」が、大阪電気通信大学駅前キャンパス6Fで、7月24日（土）13:30より15:30にわたって開催され、地域連携推進センターの中田亮生センター長（工学部環境科学科教授/気象予報士）が、「梅雨明けと上空の寒気」というテーマで、天気図の読み方の講習を含めた講演を行いました。</p> <p>講演では、この7月15日の明け方に発生し、寝屋川市に雷を伴う大雨をもたらした降水のメカニズムを、地上・高層天気図および気象衛星画像などから読み解く内容で、参加者は配布された専門天気図に赤ペンで書き込みながら、熱心に聞き入っていました。</p> <p>当日は冒頭、広瀬慶福寝屋川市長も挨拶に來られ、大阪市内の防災士を含めた約70名が参加されました。日本防災士会大阪府支部幹事の羽藤美太氏（地区防災計画学会）による講演も同時に行われ、地域住民が協力してつくづく地区防災計画の重要性について熱弁されました。</p> <p>防災士とは、特定非営利活動法人日本防災士機構が認定する民間資格で、「自助」、「互助」、「協働」を原則とし、社会のさまざまな場面で、被災と防災の両方に向けた活動が期待され、かつ、そのために十分な意思・知識・技能を有する者として認められた人」のことを言います。災害列島と呼ばれるわが国においては、「事前の防災対策」と「災害発生時の応急対応（減災活動）」の両面について「全国的な備えが必要」であり、過去の規模的な災害の教訓を活かすために、地域防災力の向上を担う新しい民間の防災リーダーを飛躍的に拡大・養成することをめざして、特定非営利活動法人日本防災士機構が設立され、2003年10月に初めての防災士が誕生し、防災士制度がスタートしています（日本防災士会ホームページより抜粋）。</p> <p>大阪電気通信大学地域連携推進センターでは、このたび初めて、地域の防災士会との連携活動が実現しました。今後も多方面で地域貢献を進めていきたいと考えております。</p>
<p>本学駅前キャンパスを寝屋川市の集団接種会場として提供します</p>	<p>8月2日（月）から、本学駅前キャンパスが寝屋川市の新型コロナウイルスワクチン集団接種の会場の一つに設定されました。</p> <p>寝屋川市では、今後接種対象が後世代に移行することから、これでの集団接種会場を再編成し、利便性の高い寝屋川市駅前会場施設を検討。寝屋川市からの会場使用の要請を受け、本学は地域での新型コロナウイルス感染症拡大防止への貢献を目的として、駅前キャンパスの提供を決定しました。</p> <p>詳しくは寝屋川市のWebサイトをご覧ください。</p>
<p>追手門学院大学、摂南大学及び株式会社ワイズと共催で公開講座オンラインイベントを開催します</p>	<p>追手門学院大学、摂南大学及び株式会社ワイズと共催で、2021年9月5日（日）に公開講座「今とこれからの子供たちを取り巻くICT教育・サイバーセキュリティを学ぶ」をオンラインで開催します。</p> <p>本学からは、共通教育機構 人間科学教育研究センターの大村基将特任講師が「プログラミング」をキーワードに子供と対話するための「学校で行われるプログラミング教育」について、講演します。</p> <p>第1部 大阪電気通信大学 「「プログラミング」をキーワードに子供と対話するための「学校で行われるプログラミング教育」を知る」          ■日 時：2021年9月5日（日）10:30-12:00          ■主 催：摂南大学「ワイズ」空間に遊びながら家庭を守るサイバーセキュリティ          ■日 時：2021年9月5日（日）11:00-12:00          第3部 追手門学院大学「大学における教育の「デジタル化」と「グローバル化」の動き-将来の大学選びの参考に-」</p>
<p>兼宗教授がデータサイエンスについてのオンライン研修を行いました</p>	<p>8月2日（月）と8月23日（月）に、埼玉県の高等学校の教員100名を対象とした研修で、ICT社会教育センター長代理の兼宗進教授（電子機械工学科）が「情報ITオンライン研修」の研修を行いました。</p> <p>研修前半では、兼宗教授が小学校から大学に行うデータ活用を取り入れられていき、来年4月からの新教育課程で、高等学校の数学Bと情報I,IIではどのような統計的な内容とデータサイエンスの内容が授業で扱われるのかという講義を行いました。</p> <p>研修後半の実習形式では、兼宗教授が大阪電気通信大学高等学校の理本生教諭と共同で開発したオンライン学習環境「Connect DB」を使用してデータ活用の実習を行い、その中で埼玉県の自治体が公開している「文化財一覧」のオープンデータを地図にプロットし、スマートフォンで振動データをリアルタイムで計測して可視化する実習を行いました。</p> <p>最後のまとめでは、2024年度に実施される大学入学共通テストでのサンプル問題を解説し、情報科学の基礎や情報デザイン、プログラミングを利用した問題解決、散歩回行などを利用した</p>
<p>防火・防災訓練を実施しました</p>	<p>9月3日（金）、防火・防災訓練を実施しました。</p> <p>大阪府が実施する「大阪880万人訓練」に合わせての実施予定でしたが、大雨による警報発令のため中止となり、本学の防火・防災訓練は規模を縮小して行いました。</p> <p>※「大阪880万人訓練」は、伝達された災害情報を認識し、自分の身を守る行動や、災害時の備えの確認をすることを目的に、大阪府内で実施されるものです。</p> <p>本学では、震度6強の地震が発生し、それに伴いA号館3階実験室より出火したと想定し、非常放送、自動消火、初期消火、安全確認及び各建物1階までの避難などの訓練を実施しました。</p> <p>工学部環境科学科の高岡研究室は、高岡大准教授と学生が火災発生から連絡、消火器・消火栓の確認、初期消火活動の訓練を行いました。</p> <p>教職員や学生らは避難経路をより避難場所に集まり、安全確認などを行うことで、改めて防災の大切さを確認する機会となりました。</p>
<p>兼宗教授が監督・制作に携わったプログラミング動画教材（IPJS MOOC）が公開されました</p>	<p>ICT社会教育センター長代理の兼宗進教授（工学部電子機械工学科）が監督・制作に携わった、高校生・高校教員向けのプログラミング動画教材（IPJS MOOC）が一般社団法人情報処理学会から公開されました。</p> <p>兼宗教授は「情報通信ネットワークとデータの活用」の「ストーリー3 データベース」の監督・制作を担当しています。</p> <p>また、昨年公開された「コンピュータとプログラミング」の「ストーリー3 モデル化とシミュレーション（Pythonを使ったシミュレーション入門）」も引き続き公開されています。</p>
<p>追手門学院大学の教員・学生らが、本学の運動解析実習室やモーションキャプチャスタジオでデータ測定を実施しました</p>	<p>本学と教育・研究等に関する連携協定を締結している追手門学院大学の松井 健嗣副学長（社会学部 社会学科教授）をはじめとした教員・学生らが、本学の運動解析実習室やモーションキャプチャスタジオでデータ測定を実施しました。</p> <p>本学四條観キャンパスにある運動解析実習室では、運動中の重心の変化や関節の動きがわかる「運動解析装置」や、全身の筋力を正確に測れる「筋機能計測装置」など、人の体を計測する機器を使用し、運動の実習や研究を行っています。</p> <p>また、同じく四條観キャンパスにあるモーションキャプチャスタジオでは、専用のスーツを着用した人間の動作のデータをとり、CGキャラクター等に反映することで、リアルな動きを実現できます。本学の所有するスタジオは、関西最大級の広さを誇ります。</p> <p>当日は、本学の教員や学生らがサポートする中、運動解析実習室・モーションキャプチャスタジオの2か所から、追手門学院大学野球部の選手2人ピッチングやスイングの動きを測定しました。</p> <p>追手門学院大学の学生らは、興味深そうにデータ測定や実際のデータを見学していました。</p>
<p>医療科学科 日坂真樹教授の研究室が臨床工学技士国家試験対策用アプリ：LinCoを開発しました</p>	<p>本学 医療健康科学部 医療科学科の日坂真樹教授の研究室が、臨床工学技士国家試験対策用アプリ「LinCo」を開発しました。本アプリは、実際に臨床工学技士国家試験をめざして勉強した学生ならではの視点から開発され、さまざまな機能を搭載。今後は、医療科学科の学生のアプリを活用した学習を推進し、将来的にはGooglePlayでの一般公開をめざします。</p> <p>■本件のポイント          ●本学医療健康科学部 医療科学科 日坂研究室が臨床工学技士国家試験対策用アプリ「LinCo」を開発          ●研究室の卒業研究テーマを元に学生が主体となって開発を手助け、教員や学内の協力を得ながら製作          ●実際に国家試験に向けて学んだ学生の経験をもとに開発、学習に役立つ幅広い機能を多数搭載          ■制作のきっかけ・目的          2019年、臨床工学技士の試験対策用に本学で使用しているe-learningシステムより勉強しやすく、スマホで気軽に勉強できる環境を後輩に提供することを目的に、まだ少ない臨床工学技士試験対策用アプリの開発を日坂研究室の卒業研究テーマとして設定。大学院 医療福祉工学科 医療福祉工学専攻 修了生の木元康平を中心に製作が進められました。</p> <p>途中、研究室の学生らにも実際に使用してもらいながら、2020年1月に初代が完成。その後、医療福祉工学部（現 医療健康科学部）の学生による使用が開始。約2年の開発期間を掛けて、リサーチし、複数回の改良を重ね、2021年5月に3度目の改良版の完成に書き進めました。</p>
<p>第38回センシングフォーラムが開催され、通信工学科前川泰之教授が特別講演を行いました</p>	<p>9月30日（木）、10月1日（金）に計測自動制御学会（SICE）計測部門主催、本学共催でオンライン開催された「第38回センシングフォーラム 計測部門大会～新たな地平を切り開くセンシング～」で、情報通信工学部 通信工学科の前川泰之教授が特別講演を行いました。</p> <p>「センシングフォーラム」は、センシング技術をキーワードとし、SICEの幅広い分野での技術交流・情報交換を通じて、参加者の交流・親睦、若手研究者・技術者の育成を図ることを目的に毎年開催されており、研究発表だけでなく特別講演なども企画されています。</p> <p>前川教授は、2020年度衛星通信研究も受賞した「衛星通信回線に対する降雨の影響の長期観測結果」についての特別講演を行いました。</p> <p>特別講演では、本学の衛星通信研究施設で過去32年間、主に衛星放送電波（BS、12GHz）を受信して行われた衛星通信回線に対する降雨の影響を詳しく示し、BS（12GHz）およびCS（20GHz、直径5mのアンテナ）による降雨減衰の年間時間率は、世界電気通信連合（ITU-R）が降雨減衰から推奨する予測値とはほぼ同じ値を示すことを述べました。</p> <p>2006年以降は温暖化や集中豪雨の増加により、降雨減衰の統計値は降雨強度の統計値と比べて増加傾向にあり、本学寝屋川キャンパスの他に四條観キャンパスあるいは守口市の大阪電気通信大学高校にもBSアンテナを設置して同様の測定を10年近く行っています。</p> <p>当日は「この電波観測のネットワークを全国的に広げられ、さらに新しい知見が得られるか」など今後の研究に期待できるような質問も上がり、オンライン上で多くの方々にご購読いただきました。</p>
<p>なわフェス'21をオンラインで開催します！</p>	<p>11月3日（水）に四條観キャンパスイベント運営委員会が主催する「なわフェス'21」をオンラインで開催します。</p> <p>12日となる「なわフェス」は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況を鑑み、昨年度に引き続きオンラインで開催いたします！</p> <p>今年度は「オタクだけのフェス」をテーマとし、本学四條観キャンパスの魅力や企画などを紹介するトークイベントや謎解き企画など、さまざまな企画を実施いたします。オンライン開催は二度目となり、昨年度を経てさらにパワーアップした「なわフェス」をお楽しみください。</p> <p>当日の開催に向けてTwitter等SNSで随時、最新の情報を発信していきます。</p> <p>ぜひフォローしていただき、最新の情報をゲットしてください！</p>

<p>「地域連携学生フォーラム in 大阪2021」で本学学生が地域のカフェリノベーション活動などを発表しました</p>	<p>10月17日(日)、大学コンソーシアム大阪主催の「地域連携学生フォーラム in 大阪2021」に環境科学科 中田亮生教授と教育開発推進センター 斉藤幸一特任講師と学生らが参加しました。地域連携学生フォーラムは、大学コンソーシアム大阪各大学の学生が取り組んでいる地域連携活動について発表を行う企画で、コロナ禍の影響で2年ぶりの開催となりました。今年の内容は「繋がる広がる変化する」をテーマに原動力に前進していく地域へ。主体となる8大学13チームの発表があり、学生・関係者を含む約70人が現地へ参加しました。当日はYouTubeでのライブ配信も行われ、活発な交流となりました。本学学生の発表タイトルは「OECUカフェラボプロジェクト2020&amp;2021年度活動報告～地域のカフェリノベーション～」で、7年前から実施しているプロジェクトの活動状況を含め、授業科目「地域プロジェクト活動1・2」の成果の一部や、近年の地域と連携した活動を、大学院生2人、学部生3人の計5人グループが発表しました。</p> <p>■発表学生 工学部 基礎理工学科 2年 藤井愛美 工学部 基礎理工学科 2年 齋藤史翔 工学部 環境科学科 3年 清水菜央 大学院 工学研究科 工学専攻 2年 澤野翔哉 大学院 工学研究科 工学専攻 2年 平原隼乃 カフェラボプロジェクトでは、「古いものを愛で、大切に使う」をコンセプトに、使われていない大学内の古い研究室(ラボ)や備品をリメイクし、どこか懐かしさの漂うカフェにするリノベーション活動を行っています。</p>
<p>第55回日本サインデザイン賞にてOECUIノベーションスクエアが銅賞を受賞しました</p>	<p>公益社団法人日本サインデザイン協会(SDA)が主催する「第55回日本サインデザイン賞」にて、寝屋川キャンパスの「OECUIノベーションスクエア」のデザインが銅賞を受賞しました。日本サインデザイン賞は、優れたサインデザイン作品を広く社会にアピールすることにより、サインデザインの普及および啓蒙をはかることを目的として、1966年以降続けられてきたのが「国で唯一のサインデザインに関する顕彰事業です。今年、本学寝屋川キャンパスに2022年3月に竣工した「OECUIノベーションスクエア」のサインデザインが、応募総数343点の作品の中から見事銅賞を受賞しました。</p> <p>◆日本サインデザイン賞 銅賞 大阪電気通信大学 寝屋川キャンパス OECUIノベーションスクエア ディレクター エモーション・スペース・デザイン:渡辺太郎 デザイナー エモーション・スペース・デザイン:渡辺希理子 デザインパートナー 株式会社竹中工務店:宮本聡子 デザインパートナー 株式会社竹中工務店:加藤実悠 施工者 日本サイン株式会社 撮影 竹中写真事務所:竹中研二</p> <p>◆概要 Flooting Number-浮遊する象徴的なアイコン キャンパス全体を東西に貫くパサージュを中心とした大空間。ガラス面や吹抜けを多用したオープンでコミュニケーション豊かなこの空間に、シンボリックな数字や記号のアイコンが軽やかに浮遊し、学生や教職員を誘う。無数の個(点)が集まり、形を形成する個性的なアイコンは具体的な形を持たない電子・通信・情報・ネットワークをイメージし、オープンな空間の中で多様なネットワークを連結しアクティブな相乗効果を生み出す。また、デジタル的な表現ばかりではなく、機能上、人が触るようなプレートサインは温かみのある木材と金属素材を組合せ、大阪電気通信大学の理念である人間力×技術力の表現を試みた。</p>
<p>四條畷市との官学連携講座でゲーム&amp;メディア学科の木子准教授が漢詩の講義を行いました</p>	<p>四條畷市と本学が連携する官学連携・大人のみ講座「中国語で読む・漢詩の世界」(全9回)が11月12日(金)、同市立公民館で行われ、本学総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科の木子准教授が担当しました。初回となる今回は「漢詩の華」をテーマに、声調言語である中国語特有の発音や詩作の背景を解説しながら、受講した市民16人に漢詩の楽しみ方を伝えた。講義の冒頭で、木子准教授は悠長な歴史を持つ漢詩の成り立ちや詩の形式について説明。「唐代に作られ、音楽性や民衆性に富む詩風は五・七言詩近代詩の最高峰です」と呼ばれており、世界人類の宝と言ってもいいと思います」と紹介しました。続いて、唐詩を鑑賞するための知識として「字眼(じがん)」や「警句(けいご)」などについて説明した後、初唐詩人である「虞世南(くせいなん)」の作品「蝉」を取り上げました。木子准教授は中国文学の中で高潔な生き物とされる「蝉(せん)」に込められた作者の思いや情景をわかりやすく分析。受講者は熱心にノートをとりながら、木子准教授とともに朗読し、詩の音やリズムを楽しんでいました。講義の最後に木子准教授は「日本学んだ唐詩の簡単な言葉から、大変奥深いものを感じていただけたと思います。皆さんもこれまでの人生で色々なことを経験され、社会で活躍してこられたと思います。そこには様々な物語があったことでしょう。これらも『蝉』のような清らかで高潔な精神を持って、日々を楽しみ進んでいただきたいです」と受講者に語りかけていました。次回の講座は11月19日(金)と同日26日(金)、それぞれ「笑って問う客何処より来ると」「峨眉月半輪の秋」をテーマに、貫知章(がしちよう)、王昌齡(おうしやうれい)、王維(おうい)、李白(りはく)の作品を鑑賞する予定です。</p>
<p>四條畷キャンパスで防火・防災訓練を実施しました</p>	<p>11月26日(金)、四條畷キャンパスで防火・防災訓練を実施しました。今回実施したのは、大規模地震より8秒の短縮を目標とした防火訓練で、四條畷キャンパスの学生、教職員がコナミホール前広場に避難するという内容の訓練です。参加した学生・教職員は、館内非常放送、初期消火活動、避難誘導、避難を行い、自分の身を守る行動をとり、安全を確保しながらコナミホール前広場へ避難しました。避難完了後、水消火器による消火訓練を実施しました。参加した学生たちは「火事だ!」と声を出し、真剣に消火訓練に取り組んでいました。最後に消防員より講評と質疑応答が行われ、学生・教職員から「消火器の仕組みについて」「家庭での防火防災について」など多くの質問がありました。実際の災害を想定した訓練を行うことで、学生・教職員の災害に対する防火・防災意識を高める非常に貴重な機会となりました。</p>
<p>デジタルゲーム学科・ゲーム&amp;メディア学科「社会プロジェクト実習」木子・由良班がゲームイベントを開催しました</p>	<p>12月4日(土)、本学総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科「社会プロジェクト実習」授業の木子・由良班が、四條畷市民総合センターで自作のゲームを集めたイベント「なわてのゲームにチャレンジしよう!みんな集まれ!市民ゲーム大会」を開催しました。同市内の小中学生や市民が集まり、四條畷の魅力発信するツールとして学生が制作したゲームを体験していただきました。木子准教授が指導するプロジェクトチームは、南朝武將・楠正行(まささつ)の顕彰・伝承活動に取り組む市民団体「四條畷楠正行の会」の依頼を受けて、4年前から絵本制作やワルタ大会、ポスターセッションなどを開催。昨年度から由良良人教授の班も加わり、木子・由良班のプロジェクトで37人の学生が合同でゲーム制作に参加。「遊びながら四條畷の歴史や文化を学ぼう」をテーマに取り組めました。イベント当日は「~楠正行が征く~遊戯!四條畷の戦い」や「キリシタンの旅~SHJONAWATE~」「荒波渡りゲーム」「街道を往く」など8種類を展示発表。東條平市長と植田篤司教育長もイベントに出席され、各ゲームを視察されました。四條畷市の名所を巡るすぐらゲームに参加された東市長は「とてもよかったですゲームで大盛り上がりしました。四條畷市内の小・中学校では、地域に開かれた教育をめざしています。今回のイベントのように地域と大学が一緒に取り組むのは自治体として学ぶところが多く、今後の行政に活かしていきたい」と語っておられました。今春から制作に取り組んだゲーム&amp;メディア学科3年の山西康太さんは「前期はオンライン授業でしたので、ゲームのルール作りなど設定の基礎をチームでまとめるのに苦労しました。やっと対面授業になった後期は、制作時間が限られていたが、先生方のサポートを得てなんとか完成。自分の作ったものを学友のみんなに見てもらうことができ、とても良い経験になりました」と笑顔を見せていました。</p>
<p>本学esports project所属の山口勇さんが毎日みらい創造ラボ 成果報告会「デモデー」でグランプリを受賞しました</p>	<p>本学大学院総合情報学部専攻デジタルアート・アニメーション学コース2年生で、esports project所属の山口勇さん(株式会社PACkage代表)が、毎日みらい創造ラボ 成果報告会「デモデー」でグランプリを受賞しました。毎日新聞などが設置する「毎日みらい創造ラボ」は、創業準備期からの事業成長を支援することを目的に、第7期の起業家支援(シードアクセラレーション)プログラムを実施。受講した3チームの成果報告会「デモデー」を開催しました。山口さんは各チームのイベントなどを企画、プラットフォーム化するために会員登録を行ったことや、原価が大きくなる既存のオフラインイベントではなく、配信やオンライン参加を取り入れ、入場制限をなくすることで利益率よくするアイデアなどを発表しました。今回のグランプリ受賞について山口さんは「取り組むアイデアを評価していただき嬉しいです。賞金は事業に投資し、副賞として4年分まで頑張りたいと思います」と喜びを話してくれました。「from Osaka by PACkage」をキーワードに、eスポーツを中心とした世界中から注目とお客さんが集まるイベントを目指します」と喜びや今後の展望を話してくれました。</p>
<p>大石理事長・学長が大学運営の改革や人事制度に関する取り組みについて講演を行いました</p>	<p>12月17日(金)、大石理事長・学長が地域科学研究会 高等教育情報センター主催のセミナーにおいて、大学運営の改革や人事制度に関する取り組みについてオンラインで講演を行いました。本セミナーでは、教育・学術の質保証が重視される中、カギとなる「教員の個人力」や「教員らの活性化」についての評価や処遇システムの創工夫・導入・改革に関し、法的諸問題についての講義や先導的な取り組みを行っている大学の事例による講演が行われ、各大学の関係者が参加されました。大石理事長・学長は、企業経営者としての経験を踏まえ、これまで取り組んできた大学運営の改革や人事制度に関する取り組みについて、具体的な事例を交えながら講演し、大学トップとして5年半余の教職員とのコミュニケーションプロセスについても紹介しました。</p>
<p>公開講座「DX時代の金融を考える～デジタル化と個人投資家の投資行動～」を開催しました</p>	<p>12月23日(木)、公開教養講座「DX時代の金融を考える～デジタル化と個人投資家の投資行動～」を開催しました。この講座は、投資や金融市場のデジタル化に関心をもちたい方をお招きし、学習の場を提供するために開催したものです。当日は3密を避け、マスク着用と手指の消毒、換気などの新型コロナウイルス感染症予防対策を行いました。講師は、金融経済学部の袖山則宏教授、堤隆一准教授、荒木千秋特任講師がそれぞれのテーマで投資環境の変化や金銭リテラシー、セキュリティに関する最新技術などをわかりやすく解説。講義だけでなく、金融リテラシーに関する簡易的な小テストや、セキュリティに欠かせない暗号技術の体験なども楽しんでいただきました。開催プログラム 1. 金融の新しい潮流 金融経済学部長 教授 袖山 則宏 2. 金融リテラシーを正しく理解! 正解のない投資への対処法 金融経済学部 特任講師 荒木 千秋 3. デジタル化をささえる最新技術 金融経済学部 准教授 堤 隆一</p>
<p>ゲーム&amp;メディア学科の木子准教授研究室のゼミ生が四條畷市の盤双六イベントに参加しました</p>	<p>12月27日(月)、本学総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科の木子准教授研究室の学生が、四條畷市のイベント「親子で遊ぼう!展示ホール開放デー『盤双六遊び』」に参加しました。会場となった四條畷市立公民館に小学生と保護者らが集まり、木子ゼミの研究テーマである古代盤上遊戯「盤双六」に挑戦。学生が対戦ルールを教えたもたらった子どもたちは盤双六に熱中し、駒(コマ)の音を響かせながら白熱した戦いを繰り広げていました。同イベントは「冬休みに入った子どもたちに遊びの場を提供し、様々なゲームを通して親子で楽しい時間を過ごしてもらう」ことを目的に企画され、遊戯史の研究に取り組む木子准教授研究室に作品の出展協力の依頼をいただきました。紀元前のエジプトを源流とする「盤双六」は3世紀頃に中国に伝えられ、日本には約7世紀ごろに伝来。「日本最初のボードゲーム」として貴族から庶民まで幅広い層に広がりました。今回出展した盤双六は木子研究室で保存されている江戸時代の作品です。黒駒が素材の盤と、動物の骨で作られたサイコロ、裏や黒黒で作られた白黒駒(コマ)、竹筒で構成されたセットを展示しました。会場では子どもたちが行ったゲーム&amp;メディア学科4年、内山侑真さんと鈴木直人さんは「研究室では3Dプリンターを使って古い盤の復元や修理を行っています。盤双六は色々なルールがありますが、今回は子どもたちにもわかりやすい『駒』という簡単なルールで遊んでもらいました。楽しんでくれたようで良かったです」と話していました。木子准教授は「古代は戦術としても用いられた盤双六は人間社会と深い関わりがあります。ゲームの途中でも劣勢でも最後まで諦めずに進んでいくことが多々あり、『最後まであきらめてはならない』という人生の教訓にも通じます。デジタルゲーム世代の学生たちが古文書を解析してゲームのルールや歴史を知ることとはとても意義深いです。将来、彼らがゲーム開発する仕事に就いた時、多くの人に受け入れられる厚みのあるゲーム作りができることを願っています」と期待を込めていました。</p>
<p>寝屋川市立中央幼稚園に廃材を使った収納BOXを贈呈しました! (インテリア計画:建築学科2年次)</p>	<p>工学部建築学科の授業「インテリア計画(北澤 誠男准教授)」では、2019年度から地域貢献・地域連携の一環として、本学に隣接する「寝屋川市立中央幼稚園」に本学のキャンパスリニューアルに伴い伐採した木や、廃材などを使用してさまざまな木工作品を贈呈しています。3回目となる今回は、木工所から出た角棒廃材や、キャンパスリニューアルに伴い伐採したボラの板材などを使用して、園児が自ら楽しくお片付けするための収納BOXを製作しました。事前打合せの様子はこちら <a href="https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/884">https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/884</a> デザイン審査の様子はこちら <a href="https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/915">https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/915</a> 製作の様子はこちら <a href="https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/940">https://www.osakoc.ac.jp/project_now/a/940</a> 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、今年も本学と幼稚園をZoomで繋ぎ、学生たちは完成した31個の収納BOXをJ号箱1階のラウンジに並べて、オンラインでお披露目しました。はじめに、北澤准教授より今回の取り組みの背景や、収納BOXが作られた過程などをわかりやすく説明。園児の皆さんは興味深々の様子で皆に聞かれました。その後、それぞれの作品の代表者が幼稚園の先生方と園児の皆さんに収納BOXの使い方や込められた思いをプレゼン。学生たちは興味を持って聞いています。「これなんだ?」「〇〇は好き?」と、園児の皆さんとコミュニケーションを取りながら説明しました。また、このプレゼンでは、アシスタントの北澤研究室4年の学生がカメラを持ち、プレゼンする学生の姿や収納BOXがよく見えるようにサポートしていました。オンラインではありましたが、収納BOXを見た園児の皆さんの反応を感じることができ、学生たちは達成感と喜びでいっぱいの様子でした。オンラインでの説明が終わった後、少数の学生が幼稚園に収納BOXを運び入れ、北澤准教授と木工所の中山さんより使用方法と安全に関するご説明を行いました。</p>

<p><b>総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科いしげき研究室がQRコードを使ったゲーム大会「QR200 in KYOTO」を開催しました</b></p>	<p>本学総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科のいしげき教授の研究室が1月28日（金）、29日（土）の2日間、京都府丸の内コンベンションホール（京都市中京区）でQRコードの情報を読み取ってゲームを展開する大会「QR200 in KYOTO」を開催しました。</p> <p>コロナ禍で3密回避や非接触が求められ、イベントのあり方が模索される中、いしげき研究室は新しい生活様式にマッチしたコンテンツを開発。今回の大会では床上に配置したQRコードの情報を読み取り、参加者のソーシャルディスタンスを保ちながらゲームを展開していくコンテンツを出展しました。</p> <p>参加された方は京都の基盤型マップ（今出川通～四条通/堀川通～東大路通）に配置された202枚のQRコードから様々な情報を読み取り、参加者同士の間隔を保ちながらゲームを楽しんでいました。</p> <p>大会当日は京都市内を舞台に見立てた3パターンコンテンツを披露しました。</p> <p>制限時間内にカフェや土産物店などいくつのお店を見つけることができるかを競うゲーム「基盤型QR!」や、参加者自身が隊士になって浪士を探し出す「新撰組 見参! 不退浪士を捕縛せよ!」を展開。</p> <p>「あなたが陰陽師!」ではものけが現れる井戸をQRコードを読み取りながら探索するゲームで、スクリーンに動画を上映するなど演出にも工夫を凝らしました。</p> <p>製作に取り組んだいしげき研究室の学生10人は、対象年齢や参加者のレベルに合わせて難易度に幅を持たせ、ゲームの入れ替えも短時間で差し替えることができるように設計しました。</p> <p>3つのコンテンツすべてを体験した京都市内の会社員、山中大地さんは、「ボードゲームの感覚で楽しめる斬新なコンテンツだと思いました。自分のスマートフォンひとつで密にならずに遊べるのて、非接触イベントが求められる今の時代にマッチしていますね」と話していました。</p> <p>製作を統括した大学院総合情報学専攻デジタルアート・アニメーション学コース2年、山内悟さんは、「非接触型システムでありながら、ゲームとしての面白さも両立できるコンテンツを目指して製作に取り組みました。QRコードに慣れない人でもスムーズに参加できるように本番前に練習タイムを設けるなど、臨機応変に対応したかがあって、参加者の皆様には楽しんでいただけたと思います」と笑顔を見せていました。</p> <p>本大会の運営・統括を担当したいしげき教授は「ゲームの大枠が完成した後、四條明キャンパスのコンミホール2階に半年間設置し、試行錯誤を重ねました。学科内の他の先生に実際にプレイし</p>
<p><b>「SDGs探求AWARDS 2021」で審査員特別賞を受賞しました</b></p>	<p>一般社団法人 未来教育推進機構が主催する「SDGs探求AWARDS 2021」で、本学の「異分野協働エンジニアリングデザイン演習「チーム3」が審査員特別賞を受賞しました。</p> <p>昨年度より開講された「異分野協働エンジニアリング・デザイン演習～学科横断型プロジェクト～」は、工学部4学科（電気電子工学科、電子機械工学科、機械工学科、環境科学科）と情報通信工学部通信工学科の合同開講科目（3年次）。異なる学科の学生がチームを構成し、チームワークの大切さに気づきながら、プロジェクト活動を実施しました。</p> <p>その中の一つのグループ（チーム3）が提案したアイデアが、今回審査員特別賞に選ばれました。</p> <p>■活動の様子はこちら  <a href="https://www.osakac.ac.jp/project_now/eee/850">https://www.osakac.ac.jp/project_now/eee/850</a>  <a href="https://www.osakac.ac.jp/project_now/eee/894">https://www.osakac.ac.jp/project_now/eee/894</a></p> <p>「SDGs探求AWARDS」は、「世界の国や地域におけるSDGs達成のために、私たちができる、または実施しているアクションについて」をテーマにアイデアを募集。</p> <p>今回受賞した「異分野協働エンジニアリングデザイン演習・チーム3」は、「モグラの鎌状骨を模した容量可変型スコープの開発」として、コロナ禍において自宅に園芸をする人が増えているというデータに着目し、小規模な園芸作業を効率的にする器具としてモグラの手の構造をヒントに園芸用スコープを提案しました。</p> <p>創意工夫やアイデアが評価され、総数2674件のエントリーの中から審査員特別賞に選ばれました。</p> <p>1月13日（日）には、オンライン表彰式が開催され、受賞学生たちは「自分一人の知識や経験では到底できないことを、異分野の仲間が協力し合い満足できるものができ、達成感と幸福感を感じました。私たちのスコープが、将来、皆さんに使われて、SDGsの達成に少しでも役に立てばうれしく思います」と受賞の喜びを話しました。</p>
<p><b>「おうちDE! ?理科実験教室2022がオンラインで開催されました</b></p>	<p>震災復興ボランティアの一環として本学の学生たちが取り組む「おうちDE! ?理科実験教室2022」がオンラインで開催されました。</p> <p>この実験教室は2016年から工学部環境科学科の学生たちが福島県相馬郡新地町に出向き、地元の小学生を対象に開催。青藤安貴子教授監修のもと、子どもたちに科学や自然の不思議を楽しみながら学んでもらおうと、様々な実験を展開してきました。</p> <p>しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、一昨年は開催が中止、昨年は初めてのオンライン開催となりました。</p> <p>今年は、総合情報学部ゲーム&amp;メディア学科の由良研究室の学生たちが新たに「電気クラグをつくらう」「ひみつの手紙を書こう」の2つのテーマで実験・解説動画を撮影・編集し、YouTubeに配信。環境科学科の学生が用意した実験キットを新地町の小学生に送付して、昨年度作成した「黒ペンの色を分けよう」の実験と共に、子どもたちに実験を楽しんでいただきました。</p> <p>後日、6年生の児童の皆さんが一生懸命実験に取り組む様子をお送りいただきました。</p> <p>リモートでも楽しんでいただけるように撮影や準備などに取り組み、学生にとっても貴重な経験となりました。</p>
<p><b>自由工房Solar Team Ku-Onの学生らがpico-EV・エコチャレンジ2022で3位入賞しました</b></p>	<p>電気自動車やソーラーカーを設計、製作し大会出場をしている自由工房の電気自動車班Solar Team Ku-Onが、3月6日（日）に開催されたpico-EV・エコチャレンジ2022で3位入賞しました。</p> <p>pico-EVとは、最小の電力で大人一人を乗せて走ることができる超小型電気自動車です。pico-EV・エコチャレンジ（一般社団法人日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門エコメカトロニクス研究会主催）は、学生自らの力により、単三電池6本を用いて長距離走行を可能にするpico-EVの設計・開発・製作・評価を行ってその技術を競う競技大会です。</p> <p>昨年に引き続き、今年も新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの開催となり、ポスターや映像、そして当日のプレゼン内容を総合的に評価する形で行われています。</p> <p>今回3位入賞を果たした「Fortune M2（フォーチュンエムツー）」は、Solar Team Ku-Onの当時の1年生7人が中心となり製作した車両です。昨年の9月から活動開始し、試行錯誤を繰り返しながら車体を作成し、今年の3月の本番に挑みました。</p> <p>電子機械工学科2年生 村上良太さんのコメント</p> <p>せっかく大学に入学したのだから、人が乗れるサイズの大きな車を作りたいと思いKu-Onに入りました。コンセプト決めの段階で、昨年picoEVに挑戦した先輩方にアドバイスをいただき、今までKu-Onで作ってきたモノコック構造ではなく、ラダー構造の車に挑戦しました。車は人が乗るものなので、安全性が特に大切。後輪のフレーム設計を工夫して、強度の計算は特に力を入れました。製作する中で、3D造形先端加工センターのスタッフの方々にサポートしていただき、難しい部品の加工などを助けさせていただきました。昨年7月に鈴鹿サーキットで行われたソーラーカーレースで先輩方の作業する姿に刺激を受け、自分たちに今までの全力を注ぎました。自分たちもこれから次の大会に向けてソーラーカーの開発に携わってまいります。</p> <p>本学自由工房では、学生による「モノづくり」を支援しており、学生の日々の努力が今回のような成果に結びつくようこれからもサポートしていきます。</p> <p>自由工房 電気自動車班Solar Team Ku-Onは、今年8月に秋田県大湯村のソーラースポーツラインで行われる「WORLD GREEN CHALLENGE2022」に参戦するために新車両を開発中です。</p> <p>昨年の鈴鹿でのレースの経験を活かして、チーム一丸となって全力で取り組んでいますので、応援をよろしくお願いたします。</p>